

やんちゃがつくる心意気のまち

飛騨古川の町並み

東京大学大学院
都市工学専攻教授 西村幸夫

古川まつりと「古川やんちゃ」

日本の町家は全国どこを見てもその建て方や間取りにそれほど大きな差はないのに、その町家に住む町衆が生み出したまつりの形態や屋台の姿にはおどろくべきバラエティがあるというのは、よく考えるととても不思議なことである。

曳山ひとつとってもその姿形には変化が大きい。古川は曳山山だけではない。かつぐ山もある。そのほか、有名なものだけでも東北のねぶたやねぶた、竿燈のような灯りの祭典と日本各地に残る火祭りの火とは性格を異にする。屋台が互いに争うまつりやかついだ山の速さや勢いを競うまつりもある。

このような独創性が何に由来するのは民俗学者に尋ねたいところであるが、都市計画学者としてひとつ言えることは、いずれのまつりもまちなかの広場の空間や道路をつまぐ舞台として利用しており、まちそ



伝統的な飛騨古川祭 華やかな屋台と袴姿の町衆



夜は一変して勇壮な起こし太鼓が町を練り歩く

のものの空間構造をドラマチックに仕立て上げているところに特色があるということだ。心憎いばかりに見せ場がまちなかの各所に用意されているのである。

毎年4月19日から20日にかけておこなわれる古川まつりもそんな特色あるまつりのひとつである。昼間は絢爛豪華な屋台が町中に曳かれ、からくりが披露される。一方、夜になると情景は一変し、荘厳かつ勇壮な起こし太鼓がやはり町中を練るのである。

おとなりの高山にはこれも有名な春と秋の高山まつりがある。古川まつりも高山まつりも国の重要無形民俗文化財に指定されているが、高山まつりがどこまでも絢爛豪華一色であるのに対して、古川では昼間の静と夜の動とが鮮やかなコントラストをなしているのが対照的である。

高山と古川はいずれも金森氏の城下町として同時期に建設されたので、旧武家地と町人の関係や町人の巻之町、式之町、参之町の構造などがよく似ているのははじめとして、町家の形態や周囲の自然環境など共通しているところが非常に多い。実際、古川にはかつての昔ながらの高山の風情が良く残されていると評する人も少なくない。それなのに、まつりの姿は大きく異なっているのだ。

理由はともあれ、起こし太鼓のある古川まつりには格式と伝統を重んじるだけでは片づかない若者のエネルギーがある。上半身裸になって付け太鼓を競い合う若

「雲」のある町並み

古川のまちでもうひとつ特色があるのは町家の軒の小腕(こでん)と呼ばれる部材にほどこされた「雲」とよばれる練り方の装飾である。この「雲」そのものは1950年代半ばに案出されたものだといわれるので、それほど歴史があるわけではない。しかし、飛騨の匠と呼ばれる地元の大工たちが自分のサインがわりに各自が考案した固有の文様を彫り込んだものである。大工たちがお互いに建物の出来を自慢げに競ったのだから、その意味では、この「雲」は職人達の思い入れがこもった大切な古川の財産であるということが出来る。

古川のまちを歩いてみると、そここに「雲」のある華やかな印象に満ちた比較的新しい町家を見出すことができる。そのいくつかには「古川町景観デザイン賞」の札がさりげなく掲げられている。歴史のある伝統的な町家を守っていくことはもちろん大切ではあるが、「雲」のついた新しい町家が古川の町並みにさらに情趣を加え、より魅力のあるまちをつくっていくことに寄与していくことも同様に大切である。

古川はそのようなまちである。そしてそうした良い変化を支えているのは大工の誇りと町衆の「古川やんちゃ」の心意気なのである。

古川やんちゃはまた、何事もおかみ頼りにしないという風潮のことでもある。そのことは今の町並みの姿にも現れている。古川のまちを歩いてみるとあちこちの建物に「古川町景観デザイン賞」という表札のような木の札が掲げられているのに気付く。こうした景観賞の存在そのものはそれほど珍しくないが、古川の特長はこの賞が観光協会によって創設され、運営されてきたということである。行政主導ではなく町衆の自主性によって1986年より20年以上もこうした賞の運営を続けてきたのだ。これに限らず、古川の観光協会はまちづくりの先頭ランナーとしてこれまでずっと駆けてきたといえる。そしてそうした組織は観光協会にとどまらないのである。

古川には、「そうばくすし」という言葉がある。まわりが全体として調和している様子を「相場」と考えると、その相場をくすすような行為が「そうばくすし」である。建築でいうとあたりと違和感があり、自己主張の強い建物がそうばくすしの建物ということになる。古川には伝統的にこうしたさばくすしを嫌うという気風がある。そのため古川の町並みはこのところ次第に整ってきた。今日、訪れるたびに美しくなっていくまちなどというものはそうばくすし。それもおかみによる規制ではなく、町民の心意気からそれが出発しているようなまちは少ない。古川はそんな数少ない町のひとつである。



西村 幸夫
にしむら ゆきお

東京大学工学部都市工学科卒業 同大学院修了
明治大学助手 アジア工科大学助教授
MIT客員研究員 コロンビア大学客員研究員
などを経て現職
専門は、都市計画、都市保全計画、市民のまちづくり論など
世界文化遺産の評価等を行う世界遺産記念協会(ICOLOS)前副会長 文化審議会専門委員
東京都景観審議会会長 「たかはし町並み建築デザイン賞」審査委員長など
著書「都市保全計画」町並みまちづくり物語」など多数



「どこにでもある」から「飛騨古川らしい」駅前を彩ったひろばと店舗



杉玉の酒林が軒先に飾られた老舗の造り酒屋 壱之町



「雲」が施された街路灯



歩道橋撤去 川岸の石積や舗道を整えられた瀬戸川と白壁土蔵



1989年 いち早く匠の技術を結集して建設「飛騨の匠文化館」吉田桂二設計



統一と変化が巧みに調和した町並み 奥の町家は伝統的なファサードに修復中



新しい町家につけられた白い木口の「雲」169種に及ぶ古川大工の自らの作品への署名



飛騨古川国際音楽祭も開かれる飛騨市文化村 中庭の庭園美術館(彫刻 地元出身の中塚克久)